

St. Luke's International University Repository

哀悼:常葉恵子先生

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/705

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



哀 悼 の 辞

聖路加看護学会理事長 菱 沼 典 子

2003年8月5日に、本学会初代理事長の常葉恵子先生が休暇先のハワイで急逝されました。楽しみにされていた夏の休暇を、ご親族と過ごされておいでの時でした。あまりにも突然の異国でのご逝去は、残された者にも思いがけないことでしたが、きっと先生ご自身も、現役のまま生涯を終えるおつもりではなかったであろうと察しますと、誠に残念に思うのです。

看護界初の博士後期課程が聖路加看護大学に1988年に開設されたのち、学会の設立が計画され、1996年に本学会が発足しました。常葉先生はこの博士後期の増設と本学会の設立に尽力され、「看護実践を研究活動を通して世の中に示していく責任と役割が課せられている」と第1回学術大会の会長講演のなかで、本学会を位置づけられています。常葉先生は発足から2期6年にわたり理事長を務められ、第1回学術大会長の任をとられて、本学会の基礎を固められました。この間、日本学術会議に学術団体として登録し、学会誌を医学中央雑誌、CINAHL、MEDLINEへ登録するなど、質の高い学会をめざして活動を進めてこられました。

実践を大事にし、後に続く看護実践家・看護研究者を信頼して下さり、理事長を退かれた後も、本学会の発展を心から願って、気にかけて下さいました。長い実践家としての秀でたセンスと、経験を学問に転換する苦勞とを、暖かなお人柄でくるんで、惜しみなく与えて下さった先生のおかげで、本学会はここまで成長してきたのだと思います。本当にありがとうございます。

心からの感謝を込めて、ここに謹んで先生のご冥福をお祈り申し上げます。

常葉恵子先生への感謝

小 澤 道 子（聖路加看護大学）

常葉恵子先生は、私たちから突然去っていかれました。だからこそ、先生を際立たせていたものがますます貴重なものに思えます。

1996年4月に聖路加看護学会が誕生し、その年の9月、現在の校舎の落成式の翌日に第1回学術大会が常葉会長のもと「建学の精神の具現化と軌跡」をテーマに開かれました。それより2年前から、学会設立準備会が始まりました。先生は、聖路加看護大学が追究し続ける看護とは何かを、研究活動を通じて世の中に示していく責任と役割が課せられている、だから「今、やらなければ」という気概で立ち向かっておられました。58人の発起人を率いて設立の趣意書「聖路加看護大学の建学の精神を継承し、実践を重視する看護の学的体系化に向け、教



育・実践にある人々が一体となって、看護学の発展と会員相互の学術的研鑽と学術的交流の場として聖路加看護学会を設立する」ができたときの嬉しそうなあふれる笑顔は心にありありと残っております。

大学を離れ大阪の地で開かれた第5回の学術大会を、先生は、学会の大きな発展とことのほか喜ばれました。企画委員会のために一緒に新幹線で、先生は、聖路加の過去・現在・未来を行き来しながら、大学・大学院、学会、同窓会などについて、時に嘆き、時に憂い、時に喜びを交えて熱っぽく語られ、そして、いつも最後には、若い世代が良く育ってきて、力がついてきたので安心であると若い世代を誇って結ばれました。先生の優れた人間性と、良いと思うことをやり遂げられる強靱さ、純粋な開かれた心、そして、どの人にも向けられる暖かい思いやりは、私の心の中で生き続けています。

また、私の知る限り、本学会の学術大会、学術交流会、役員会はすべて出席され、ニュースレター、学会誌を隅々まで読んでおられました。先生は、クリスチャンとして隣人愛・人間愛というきわめて実践的な問いを生涯で答えようとした方でした。それゆえ、先生の長い看護実践や教育経験と、本学会の研究的アプローチを重んじられ、どこからでもご自身の問いに向かって学ばれようとされた一途な姿勢を知らされます。

学問的にも人格的にも、先生であつたらこうされるだろうと先生の息吹を感じながら自己の位置を確かめさせてくださる座標軸をもつ幸せを今にして心から感謝いたします。

次の言葉は、先生が第7回の学術大会に寄せられたものです。「実践、教育、研究と立場を異にしますが、各自の意見を大胆に発表し、活発な討論がなされることを期待します。このことにより、各自がより豊かになり、更なる発展につながると確信いたします。また看護学の学問的体系の構築へつながることでもあります。」

今後、常葉先生が期待された方向に本学会が発展していく歩みを継げることで、先生への深い感謝に報いたいと思います。常葉先生、ありがとうございました。